鹿部山皇石神社境内出土銅戈

古賀市指定文化財【考古資料】平成19年２月22日指定

１．位置

皇石神社は古賀市鹿部にあります。鹿部山の西側山裾に位置し、現在は花鶴丘団地の中にひっそりとしたたたずまいを見せています。境内の槙の林は大木が多く見事です。

周辺は、東町遺跡、浦口・唐ヶ坪古墳群、鹿部山経塚等多くの遺跡が存在し、鹿部山遺跡群と呼ばれます。

皇石神社境内出土銅戈

２．発見の経緯

この銅戈の発見は、今を去る100年以上前の明治31年のことでした。神社裏の崖より甕棺が現れ、その中から銅剣と銅戈が各１口出土したとのことです。

銅戈は神社のご神宝となり、銅剣は東京大学人類学研究室に保管されていました。残念なことに、銅剣は現在行方不明となっています。

３．銅戈

戈は古代中国の武器です。本来戦車戦用の武器で、相手を切る、刺すというよりは、引っかけることを主目的としたものです。日本で出土する戈は朝鮮半島より弥生時代に伝えられ、その後国産化されたと考えられています。

皇石神社の位置

銅戈出土推定地

材質には石、青銅、鉄があり、それぞれ石戈（せっか）、銅戈（どうか）、鉄戈（てっか）と呼びます。

銅戈の形状は簡単にいうと、棒が短い縦長の矢印形で、両側に刃があります。中心の部分を鎬（しのぎ）と呼びますが、刃と鎬の間には樋（ひ）と呼ばれる溝があります。矢印の棒に当たる部分を茎（なかご）と呼び、取り付けるとき、鎌のように柄に対して横向きに取り付けますが、柄に対して直角ではなく斜めに取り付けられるのが特徴です。

銅戈には形状から、細形（ほそがた）、中細形（なかほそがた）等があり皇石神社の銅戈は最も古く実用品と見られる細形銅戈です。

長さ27.7cm、幅7.2cm、厚さ1.3cmで、ほぼ完全な形を保っています。よほど材質が良かったためかさびも進んでおらず、今なお鋭利な武器の面影を良く残しています。特に本体部分がぶ厚いことや幅が狭く切っ先が鋭いこと、茎の幅が広く厚みがあること等の特徴は、丈夫さと鋭利さを兼ね備えた、実用品としての武器であったことを示しています。

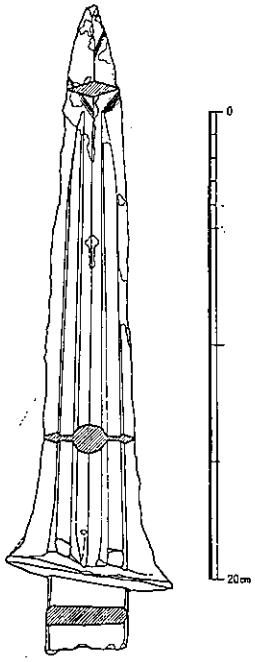
弥生時代は「倭国大乱（わこくたいらん）」の言葉が示すように、戦乱の時代でもありました。この資料はまさにそうした時代の様子を伝える貴重な考古資料です。

４．発見の意義

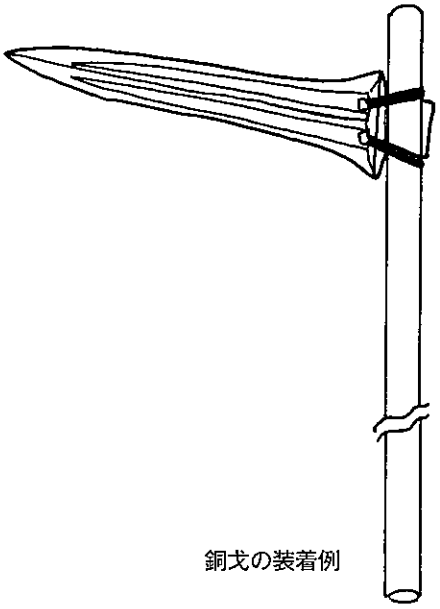
この銅戈は甕棺から出土しました。甕棺は最も良く知られた弥生時代の埋葬方法ですが、実は県内では福岡平野やその南で主体となる埋葬法で、県東部においては、例外はあるものの、石棺、木棺、土壙（どこう）墓が主で、甕棺は子供用が主となっています。従って、皇石神社の成人用の甕棺墓は甕棺墓地のほぼ東限を示すものとして貴重な遺跡です。

また、銅戈、銅剣という当時としては極めて高価なものを副葬したことは、葬られた人物の高い地位を示し、ここが周辺の王墓（おうぼ）であったことが知られるのです。

現在、遺跡は皇石神社の境内の中にあり、うっそうとした林の地下にまだ多くの墓が存在すると考えられます。神社とともに後世まで伝えたい文化財です。



皇石神社境内出土銅戈


銅戈の装着例